

## 感性を活用した風景の眺め方に関する研究

北海道開発局	正会員	井出 康郎
寒地土木研究所	正会員	三原 慎弘
(株)ジオスケープ	正会員	須田 清隆
(株)オーベック	正会員	大庭 将宣
東京工業大学	正会員	桑子 敏雄

### 1. はじめに

わが国では、世界でも例を見ない速さで、少子化・高齢化の進行が進んでいます。特に、地方はその傾向が顕著であり地域存亡の危機に面していると言っても過言ではなく、生き残りのための地域再生の議論が盛んに行われています。しかし、これらの問題は遅かれ早かれ日本中に蔓延することは確実で、近い将来、総過疎化時代が到来することも予測されます。そのとき、地域の大きな課題として挙げられるのは、人口減少と高齢化により地域の生産能力の低減対策とともに、地域自体の自信損失への住民対策だと考えられます。

そのために、個性としての地域の魅力の発見により地域の誇りや希望を地域に与える手立てが必要になってきている。地域づくりにおいては、地域の持つ風土の歴史文化やローカル・アイデンティティを、風景に融合させることで、地域風土と調和した個性を醸成し、地域に光を照らし、表情の豊かな風景形成の実現に繋がると考えています。この表情の豊かさを表す『風景』は、地域自体の魅力になり、個性になることは当然で、今の時代一番必要なことではないかと思えます。

### 2. 風景の判断に影響する知覚情報

風景の評価は、実際の風景場での視覚情報に対して個人個人の価値観や原風景に照らし合わせて、風景の良し悪しを決定していることが多いと考えます。

しかし、個人の価値観は、原体験の違いや情報量において個人差があることから、共通な風景判断を難しくしています。これは、人間の風景に対する感じ方が、単純に言葉や映像で表現ができないほど、あいまいで且つ、複雑であることからと考えます。本研究の目的は、人間の視覚から受けるイメージ形成過程にて、風景の持つ意味や価値を知覚情報として与えることによって、風景に関心を持たせる手続きに関して検討するものです。

### 3. 風景を感じる手続き

風景を感じるには、見るだけの視覚的な観点からだけでなく、聞く・嗅ぐ・味わう・触れるという人間の五感を刺激して、さらに、その風景の背景にある歴史・文化といった空間の履歴<sup>1)</sup>を理解しながら、風景に向かい合うことが重要になると考えています。ここでは、風景からその地域の風土や文化や歴史を感じ取る作法として、風景の眺め方を極める道を意味する『風景道』について提案しています。

### 4. 風景道のコンセプト

風景道とは、地域の魅力について、誰か彼かに話したくなる欲求探しであり、『地域の個性』を理解する手続きと考えます。その結果、誰か彼かに話したくなる欲求の形成が実現して、地域の個性を地域内外へ発信するきっかけとなり、地域外の人に魅力を伝えることになると思います。それが地域にとっても刺激になり、そこに住む人に自信と誇り芽生えさせ、地域の活力に繋がっていきます。地域の活力は、その地域の人たちが主体的かつ自主的に取り組んで初めて地に足の着いたものになると考えます。地域の人たちが主体的、かつ自主的に活動するには、地域の人たちの気持ちを一つにする工夫が必要になります。この工夫の一つとして、風景道では極意 17 か条を提案しています。

#### 風景道極意十七ヶ条

風景道宗匠 生野忠道

- 一 風景を聞こう
- 二 風景に触ろう
- 三 風景を嗅ごう
- 四 風景を味わおう
- 五 風景を知ろう
- 六 要するに、感性と知性を動員して風景を体感しよう
- 七 体感したうえで、風景を見よう
- 八 風景の奥行きを捉え、壁を読み、趣きをつかもう
- 九 風景のなかにいる自分を意識しよう
- 十 風景のなかに生きるよるこびをもとう
- 十一 道をたずねて、人びとの表情を読み取ろう
- 十二 風景の道づくりをみんなで考えよう
- 十三 奥ゆかしい、壁の深い、趣のある風景をつくらう
- 十四 風景のなかで残すもの、変えるもの、つくるものを論（あげつら）おう
- 十五 よその真似はやめよう
- 十六 風景をだいなしにするもの、見苦しいもの、センスのないものをつくることだけはやめよう
- 十七 風景の道をみんなで育てよう

風景，風景道，感性工学

(株)ジオスケープ 〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-2-5 TEL03-3588-5990 /Fax. 03-3588-5991

## 5. ワークショップ

風景道のワークショップには、地球の輪郭を映し出す水平線と天塩山脈の稜線がなすスカイラインから創出される非日常的ともいえるスケールの大きい景観を有する日本海オロロンライン（約315km）にある風景について風景道を検証しています。計画した風景の繋がりを確認するとともに風景の意味についてワークショップ方式（6名）で議論しています。

### ■1日目（往路）ルート

小樽市（銭函 R5, R337 合流点付近）出発～石狩市（灯台・番屋）～石狩市浜益区（千年ナラ）～増毛町（JR増毛駅、商屋丸一本間家、観光協会の建物、厳島神社、元陣屋（文化交流施設）、増毛小学校）～初山別村（真つ暗と星空）～豊富町（豊富温泉泊：油温泉）



写真-1 事前調査における風景（往路の例）

### ■2日目（復路）ルート

豊富町～サロベツ原野～稚内市（宗谷岬）～幌延町（金田心象書道美術館）～天塩町（天塩川、天塩川歴史資料館）～遠別町（世界北限の稲作）～初山別村（しよさんべつ海牛の化石）～羽幌町～苫前町（古代の里）～小平町（北創寮）～留萌市（波濤）



写真-2 事前調査における風景（往路の例）

## 6. ワークショップの意見

### (1) 石狩浜の検証

曇り空のため海が薄黒くうねる状態を視覚で感じた場合と、実際に波打ち際に近づき五感を使って、波の音を感じ、波際で海水に触れ、少し舐めてみて、ライトバンで売っていた地元の海産加工物を覗き、その加工方法に昔ながらの工夫があることを聞き、改めてそれを味わうと、石狩浜のイメージが印象付けられた。

### (2) 増毛厳島神社の検証

視覚的には、神社の鳥居のみの印象であったが、道内唯一の総透し彫りがある社殿を眺め、社殿にある奉納物を読み、社殿に直接触れ、五神が合祀されている増毛厳島神社と地域の関わりを理解し、北前船がもたらした増毛の当時の文化と豊かさなど、神社と海との空間にあった履歴を推し量ることにより、地域に対する興味を深めていくことができた。その結果、神社の風景を通して旧本間家や北前船が持ち運んだ湧水など、他の地域資産との結びつきを強くしたことで風景の持つ価値が高まっていった。



写真-3 増毛厳島神社

写真-3 増毛厳島神社

### (3) 天塩川の検証

視覚的には、暑寒別川、留萌川、羽幌川、天塩川と河川の表情の違いを楽しむ中で、天塩川では、川に近づき川の流る音や川の大きさを感じ、周辺にある原始林には北の環境の厳しさに耐えてきた腰高程度しか及ばない100年の樹齢の赤松の存在や冬場には猛禽類のおおたかが空を舞う風景を知ることにより、天塩川の表情の豊かさを感じる事が出来た。

## 7. ワークショップ成果

ワークショップを通して得られた成果を整理すると以下のとおりである。

- (1) 風景は、単純に「見る」という視覚的要素のみでなく、五感を通して感じる事、その空間の履歴を知ることにより興味が高まる事が確認できた。
- (2) 風景の見方として、「風景道」で定義した17か条の有効性が確認できた。

## 8. 最後に

地域の人が地域のために活動するには、自分の住んでいる地域が好きで、そこに住んでいることを誇りに思う気持ち（ローカルアイデンティティ）が必要になります。自分の住んでいる町には、他にはないこんなすごいものがある、都会では決して望めないこんなものがある、・・・等々です。風景道とは、気付かせるきっかけ作りでもあり、地域の人々に地域に対する魅力意識を芽生えさせる実学として期待しています。

また、風景道の実効性を高めていく上で、地域情報の共有ツールとして、ポータルサイトやHPなどの活用も検討して期待と考えています

なお、本調査においては財団河川環境財団のご指導ご支援を戴いたことに対し謝意を申し上げます。

### 【参考文献】

- 1) 桑子 敏雄(著)：感性の哲学（NHK ブックス）